

しまなみ農業だより

イノシシ 捕獲活動に ご協力ください



担当者が一生懸命取り組んでいるのに、なかなか周囲に正しく理解されず、成果に結びつかないということがあります。上島、特に弓削地区でのイノシシ対策についてはその傾向があり、実働部隊の実力はなかなかどうして立派なのに、充分発揮されているとはいえないと感じられます。その原因の多くがどうやら周囲の誤解にあるように思われるので、今号ではそのあたりの問題を解きつつ、現在の進捗状況を報告します。

1 イノシシ捕獲隊はあくまでボランティア活動である

全国で様々な被害が拡大しており、農水省でも直近の重要課題であると位置付け多くの補助金を投入した各種事業を展開しています。こうした事業では、既存の猟友会を母体にした有害獣捕獲隊を組織するのが一般的で、イノシシ猟を生業または趣味として行う組織が母体になる場合が多いのですが、上島町ではかつてイノシシがいなかったため、地区の猟友会は鳥猟を行う組織でイノシシ猟を行う目的・経験を持っていないこと、また特に弓削地区では、イノシシ対策に乗り出した有志が自己資金で始めた活動が母体となっており、全くの素人集団で始まりました。ところが彼らは創意と工夫を重ね、わずか数年で年間に100頭余りの捕獲実績を挙げるまでに成長したのは全国でも稀有な事例で

す。現在では捕獲実績に応じて補助金が支給される仕組みが出来上がっていますが、彼らは生業として行っているのではなく、あくまで郷土をより良くしよう、という思いでの活動であり、ともに実動してくれる同士を常に募集しております。

2 捕獲罠といえばトラバサミで危険という誤解

現在上島町内で使用されているイノシシ罠はくくり罠で、バネの力で4mm径のワイヤで作ったワッカを撥ね上げ、脚を縛り上げるといふもので、バネが撥ねたときに少々びっくりしますが、誤ってワイヤで自分の足を縛られても、人間なら子供でも簡単にはずせるものです。罠といえば金属のワニ口様の部品で足を挟むトラバサミを連想される方が多いようですが、このトラバサミは愛媛県内では禁止猟具となっており、上島町では捕獲活動でも使用していません。罠を設置した場合、規則で「危険!」と表示する義務があり、そのように書かれた看板を目にする機会が多いと思います。が、一般に思われているほど危険ではありません。

3 獣肉加工施設が出来て被害が無くなるという誤解

町等のご尽力があり、佐島に立派な獣肉加工施設が竣工しました。この手の施設は食肉の取扱い経験のある業者が指定管理者となる事例が多く、施設の維持のためには優良な原材料(つまり、新鮮なイノシシ)が必要なのですが、捕獲者との間で何かとトラブルに発展するケースが多いようです。しかし上島町では、先の捕獲隊のメンバーが実質的な管理・運営者になっておりますので、捕獲者と処理者が同一であり、原料の品質については折り紙つきです。しかし処理者がこれまで素人です。現在解体処理の習熟訓練に取り組んでいる状況であります。幸いメンバーの中に、かつて船員の厨房を預かる調理師出身の方が複数名居りますので、経験をつむことで製品の品質は自然と向上すると思われれます。この施設はあくまで捕獲された獣を有効利用するための施設であり、この

施設がイノシシを捕獲してくれるわけではありません。頭数の減少はあくまで捕獲活動の結果であり、より多くの方が捕獲活動に参加していただくことで実現されるのです。

4 被害を受けにくい集落づくりについて

特に弓削地区では、農地を守るワイヤーメッシュ防護柵の設置が進み、柵内では以前より安心して農作業ができるようになりました。この防護柵もイノシシに対して完璧ではないので、設置後も柵の維持管理を続けなければなりません。昨年の捕獲実績を分析してみると、5〜6月にメスを多く捕獲した地区では、その後の獣密度が低いという傾向が見られ、また罠を多く仕掛けますと、一時的にせよ獣が近寄らなくなるという観察結果もあり、罠自体に抑止力としての効果も期待できます。ところが規則で一人当たり罠30器の上限があり、また毎日見回らなければならないのが負担となつていきます。ひとりでも多くの方が罠設置と見回りに協力していただければ、捕獲と抑止の両方の効果が増すと期待されます。なお本誌2月号で竹やぶ管理についてお願いいたしました。今春取り組んでくれた方も多く、被害対策上も必要なことですので大変感謝いたします。



竹やぶでの侵入防止柵
絶対にタケノコを盗られまいという園主の意気込みが感じられます。



**がんばって間引かれた
モウソウ竹林**



イノシシの解体処理
(150kg, オス)



**弓削で設置している
くくり罠(アップ)**
バネが撥ねるとこのワッカが縮まる